

バックアウト・ムービーズ

私をKOで打ちのめした映画

Round 7

バート・ランカスターの疾走

歩くだけですごい人、バート・ランカスター。『空中ブランコ』で街を去るラストシーン。暗い裏通りを去る『山猫』。『フィールド・オブ・ドリームス』でコーン畑に消える老ドクター。ひとり歩く『大列車作戦』のラスト。『ローカルヒーロー』では、大股でタクシーに向かう。石畳の道を横切る『スコルピオ』。歩いていて振り返るだけですごい『大反撃』。

遠景のロングショットなのに、その歩きが多くを語る。『大列車作戦』の登場シーンは、ひたすら歩く彼をカメラが数百メートルも追い続ける。走ると、もっとすごい。

『エルマー・ガントリー』ではステージに向かってダッシュして、全速滑り込み。『アパッチ』では岩山を走って来て、両手でライフルを持ったまま6メートルほどの大跳躍。列車から飛び降りて、鉄橋を疾走する『大列車作戦』では、マシンガン掃射を浴びて、猛スピードで肩から転倒。体をブロックしない、この危険極まりないシーンは台本にはなかったが、バートが撮影中に穴に落ちて、足を大いに痛めて、足を引きずってしか歩けなくなったため、急ぎよ、足を痛めるシーンを追加撮影した産物。つまり、歩くのがやっとの足なのに、それをまったく見せずに走る列車からジャンプし、全速力で転倒したわけだ。銃を肩にかけたまま、ひとつの山をまるごと道まで転げ落ちる

ロングカットもある。水の上を疾走する面白いカケがあるが、監督主演作『ケンタッキー人』でライフル射撃してくる対岸の敵に向かって湖を走って突進するシーンは、まさに水上を駆けたかのような。異色作『泳ぐ人』では映画の最初から最後まで泳ぎ切るが、なんと出演が決まるまで彼は泳げなかった。作品中、衣装は海水パンツのみ。『エルマー・ガントリー』は、圧倒的なしゃべりの術でアカデミー賞獲得。

デビュー作『殺人者』(1946)でボクサーを演じ、34才で独立プロダクションを設立し、既成の単なる役者のスタイルを打ち破り、『終身犯』でベネチア男優賞、『空中ぶらんこ』でベルリン男優賞。

行動力と、気品(ヴィスコンティの『山猫』『家族の肖像』)を持った彼の前では、共演者の影が薄くなる。大スター、ゲーリー・クーパー主演の『ベラクルス』では、善玉クーパーさんは忘れ去られ、悪役のバートがキラキラと黒光りした。

「映画作りのことで何を尋ねても、笑顔で"そうだねえ、それは、あの人に会ってきいてみてごらん"とお父さんは言ったわ。全部、自分で知ってるはずなのに、いろんな人に会いに行かせるの」と、映画業界で働く娘のジョアンナ。「自分の力で身につける」ことのみで本物になれることをバートは、子供たちに伝えていた。

バートの父親の月給は2万円。5人兄弟と共に靴磨き、雪かき、新聞売りなどで生き延びた少年はマンハッタンハーレムで育ち、黒人差別に反対(キング牧師のワシントン大行進に参加)、先住民の権利のため闘い

(『インディアン狩り』)、腐敗政治を告発し(『5月の7日間』)、兵役を経て反戦活動(『ニュールンベルク裁判』『大反撃』)、反ベトナム戦争(『戦場』)、反核(『合衆国最後の日』)、反細菌兵器(『カサンドラ・クロス』)、メディア腐敗(『成功の甘き香り』)、アル中問題(『愛しのシバよ、帰れ』)、自然保護(『ドクター・モローの島』)、国境を越えてイタリアのベルトルッチ(『1900年』)やフランスのレイ・マル監督(『アトランティック・シティ』)らと仕事をし、AIDS予防キャンペーンに尽力し、青少年センターには、多額の寄付をした。

あらゆるジャンルに挑戦したバートを「彼こそまさに役者魂さ」と、何度か共演したトニー・カーティス。

銀幕で魅せる前人未だにアクションよりも、平和な世界づくりのための行動の連続だったバート・ランカスターは、80年の一生を全力で駆け抜けた。

(Luck y Day)



▲ オードリー・ヘップバーンと